



黒髪山
と
ミツバツツジ

毎年、陶器市の季節になると群生したサイゴクミツバツツジの花が、黒髪山の新緑を彩ります。町じゅうに見られるツツジよりも線が細く繊細な印象を受けるサイゴクミツバツツジは北陸から九州にかけて分布していますが、この付近では黒髪山系の周辺でのみ見られる花です。

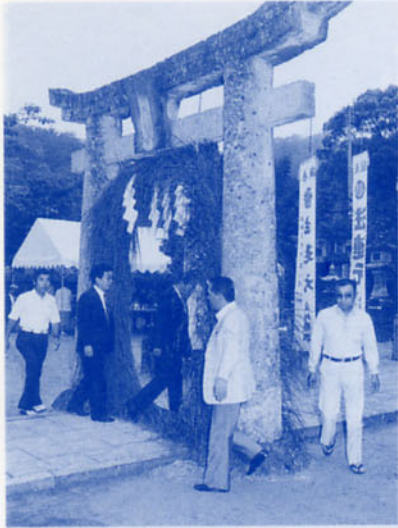
こうした植物の宝庫、黒髪山（518 m）は標高こそ高くはありませんが、その神秘的な山容から、古来山岳信仰の対象として知られています。山名の由来については「肥前古跡縁起」に「黒髪山大権現、本地薬師如来の三尊聖徳太子御作也。昔天竺の大王我朝に飛来り、（中略）権現と垂跡し給ふ。其鬚髪を納め御宝殿の所と定め給ひし故に黒髪山と云ふ」とあるほか、さまざまな伝説があります。

溪流に深く刻まれ、岩肌を所々あらわにした山容は、いにしえならずとも伝説を秘めた幽玄さを今も漂わせています。

〔写真〕山内町宮野から望んだ黒髪山と青螺山。サイゴクミツバツツジ。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.10



皿山の風物 山のぼり

茅ノ輪くぐり (八阪神社)

「当春以来、山登りと申し候て、所々へ遊参らしき躰のみ相聞こえ候。諸細工人、折節の躰散、尤もにも候えども、徒事長く候ては家業を怠り宜しからず候条、自今、急度相止め、職方に出精致し候より、洩れなく懇ろに申し聞かすべく候」(皿山代官旧記)

これは文化4年(1807)に出された「山のぼり」禁止の通達文です。「山のぼり」と言っても今の登山とは違い、物見遊山です。つらい労働と規制に縛られた生活の中に身を置く職人たちが、気晴らしを求めるのは無理もないことです。代官はそれを認めつつも、無駄なことはやめて家業に精を出すように命じています。文化・文政時代はいわゆる、化政文化という庶民の文化が最も華開いた時代です。現金収入の多かった皿山の人々が、この文化を享受しやすい立場にあったことを加えておきます。

今では6月1日が「山のぼり」の日として定着し

ていますが、それは明治30年(1897)、八阪神社の氏子総代に選ばれた松本庄之助らが神職の希望を聴き、町会や区長とも相談しながら、毎年6月1日・2日に厄払いのため「茅ノ輪(ちのわ)くぐり」「大祓(おおはらえ)」などを行うように決めたことによります。

八阪神社の厄払いと「山のぼり」が、いつごろから結びつくようになったのかわかりません。また、「山のぼり」の由来もはっきりしません。



観音山にある祭礼廟 (稗古場)

ただ一つの類似例として「礼廟祭」があります。稗古場の観音山の上には表面に「祭礼廟」、その下に左右にそれぞれ「金ヶ江氏」「深海氏」と刻まれた石祠があります。金ヶ江氏も深海氏も埴化陶工で、その子孫たちは毎年この石祠の前に集まり酒宴を開いたということです。「山のぼり」はそういったものが広まり、年中行事化され、時代に応じて形を変えて今に至ったのではないのでしょうか。朝鮮半島の民俗例を調べたことはありませんが、「山のぼり」のルーツも、ひょつとすると海の向こうにあるのかもしれない。



皿山の味 ごどうふ

有田の郷土料理の一つ「ごどうふ」を紹介します。今回は岩谷川内の高島豆腐店の御主人にお話を伺いました。

「ごどうふ」とは豆乳と葛粉を練って固めたものです。胡麻醤油などをつけて食べます。その柔らかな歯ざわりとその自然の味覚はなかなか忘れられない故郷の味です。最近では県外からの注文も多いそうです。

「ごどうふ」はまず大豆を水につけることから始まります。豆を割ってみて、中まで白くなったところで、粉碎機にかけて豆汁(ごじる)を作ります。豆汁を圧力がまで煮て、おからをこしたものが豆乳です。豆腐を作る場合はこれにニガリを加えますが、「ごどうふ」は葛粉を混ぜてゆっくりと時間をかけて練っていきます(約40分)。

そして、金型・木型に流し込んで1時間ほど冷やして出来上りです。夜中の3時半ごろ起きて、最初のごどうふが出来るのが6時ごろになるそうです。

余談になりますが、冷蔵庫に入れて固くなってしまった場合は、湯の中に入れて温めるとおいしく食べられるそうです。その際、網の上のせて温めた方が、湯の中から取り出すことが楽とのことでした。

(協力 高島豆腐店)



私と有田焼

徳見知孝先生の思い出〔上〕

長崎県立猶興館高等学校教諭 白石純英



有田陶磁美術館 最近の調査で、明治初期に建てられたものであることが分かりました。現在も有田焼の伝世品を中心に展示。毎日、観覧者が後を絶ちません。



昭和29年4月29日、有田陶磁美術館が佐賀県第1号の博物館として登録されました。同時に徳見知孝さんに副館長として、45年まで勤めていただきました。

町内外の人たちから「徳見先生」と慕われていた人でした。

徳見知孝先生が亡くなられてかれこれ10年程になる。(昭和56年死去89歳)徳見先生との出会いは卒業論文のテーマが決まった大学3年の夏休み(昭和37年)に資料収集を兼ねて有田陶磁美術館を訪れ、宮崎へ病氣療養のため転宅された昭和46年ごろのおおよそ10年間ほどと覚えている。

徳見先生の人柄や札の辻とそこにある陶磁美術館のことを、九州文学の劉寒吉さんは「有田・やきもの・その美・その思い出(肥前有田遊記)」のなかで、温もりのある親しみな文で紹介している。

『有田の町の札の辻は、正月近い十二月の朝の寒気がびいんと張っていた。東西にのびた佐世保街道のひろい本通りから白川谷に向かう道が分かれていて、旧有田町のほぼ中央にあたる場所である。その三叉路に、むかしは有田皿山代官のお触れ書などを掲げた札場があったのだろう。……ぼくはそこから一町ばかりのところにある陶磁美術館を訪れた。……』

陶磁美術館は有田のひとが今でも石倉と呼んでいる石造の家で、江戸末期には輸出用の磁器を収める藩蔵だった。……

美術館に入ると、副館長の徳見知幸(知孝の誤り)さんが迎えてくれた。篤実な老人である。徳見さんの父の智敬(知敬の誤り)というひとは西園寺公望や大隈重信とも親交のあった学者で、しかも絵付け

をよくし、有田工業学校の前身の有田徒弟学校の教師時代には、十二代柿右衛門にも教えたということである。祖父の智愛(知愛の誤り)も中林梧竹を親友に持つ学者で、のちには有田郷の戸長もつとめたというから、有田には縁の深い家柄である。

徳見さんの案内で陳列室にはいる。古伊万里はもとより、初期から中期にかけての柿右衛門も、色鍋島も、それぞれに年代順に並べられていて、それらの皿や鉢がにぶい蛍光灯のひかりに浮かんでいるのはいかにも豪華なながめであった。

二階には、参考品の古窯址から掘り出された陶片もおびただしく陳列されていた。泉山白磁磁の発見者である李參平の天狗谷窯のものや、李につづいて有田にはいった百婆仙一派の稗古場窯址の陶片をはじめ、三期にわたる鍋島藩窯址からの発掘陶片など、数百点の陳列である。』(日本のやきもの2・有田淡交新社 昭和40年)

徳見先生はいつも背を丸めて調べ物をノートに書いておられた。それは事務所を訪れる度ごとに印象的な姿であった。事務所は先生の書斎でもあった。



白石 純英

しらいし・すみひで

昭和16年に生まれる。国学院大学史学科を卒業後、長崎県立猶興館高校に勤務。「波佐見町史上巻」を分担執筆し、平戸中野焼など三川内焼の研究を続けている。東洋陶磁学会・日本陶磁器協会会員。

街角の歴史 陶祖李参平碑



伝承によれば元和2年(1616)に朝鮮人陶工・李参平が泉山の陶石を発見して有田焼を創始したとされています。

豊臣秀吉は文禄元年(1592)と慶長2年(1597)の2度にわたって朝鮮半島に兵を送りました。そして、各大名は、兵を引き揚げる際に多くの朝鮮人陶工を無理やり日本に連れ帰り、焼き物生産に従事させました。その陶工集団の一人が李参平です。「多久家文書」には李参平は多久家に仕えた後、元和2年(1616)に有田に移り住んだという記述があります。

それからちょうど300年目にあたる大正5年(1916)に、李参平の300年祭が陶山神社で開催され、その年の5月17日から21日まで各種の催し物が開かれました。その前年大正4年(1915)には品評会の際に蔵ざらえ大売り出しを初めて催したり、景気の浮沈に敏感な焼き物産業の不景気挽回策でもあったようです。

その300年祭の記念事業の1つとして、陶山神社背後の蓮花石山の丘上に李参平の記念碑を建設することが決定しました。そして、深川栄左衛門を委員長とした委員会が組織され、各有志の賛助を得て翌大正6年(1917)12月に記念碑は落成しました。これが今ある陶祖李参平碑です。碑面の題字は鍋島直映侯の揮毫によるもので、裏面の銘は佐賀中学校校長であった千住武次郎の撰文を沢井如水が書いたものです。

今、有田公園から記念碑へと登る遊歩道「陶祖坂」も整備され、有田の街並みを見下ろすには絶好の場となっています。

資料館事業のお知らせ

・町内民俗調査

昔は当たり前だったこと。最近見かけなくなったもの。今でも続いているもの。そういったものを拾い集めて、有田の今と昔を後世に伝える民俗調査を今年度から行いたいと思っています。調査員が聞き取り調査に伺った際には御協力をお願いします。

・古窯跡詳細分布調査

毎年4ヵ所ずつ古窯跡を発掘調査していますが、今年は南川原窯の辻窯、黒牟田新窯、戸杓向ノ原窯、無患子谷窯の4つの古窯跡の発掘を夏から秋にかけて計画しています。調査員を見かけましたら、気軽に声をおかけください。



NEW FACE

知北 万里(学芸員)

隣町の山内町から来ています。その地に伝わる祭りなどが大好きです。有田人の一人になって自分の中の可能性を追求していきたいと考えています。

唐臼の音

12年間、資料館に勤務されていた尾崎葉子学芸員が3月31日付で退職されましたので「濃み筆のつぶやき」は休載(?)です。長い間、お疲れ様でした。昨年の忘年会の折、飲み屋を4軒、私が引っ張りまわしたのがいけなかったのでしょうか。

梅雨が過ぎればまた発掘の季節がやってきます。結局、今年の夏も発掘と祇園で終りそうな気がします。(建)

有田町歴史民俗資料館報 No.10

発行年月日 * 平成2年6月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678